

Colla:J 4月号 羊の毛 2015
http://collaj.jp/
時空にえがく美意識

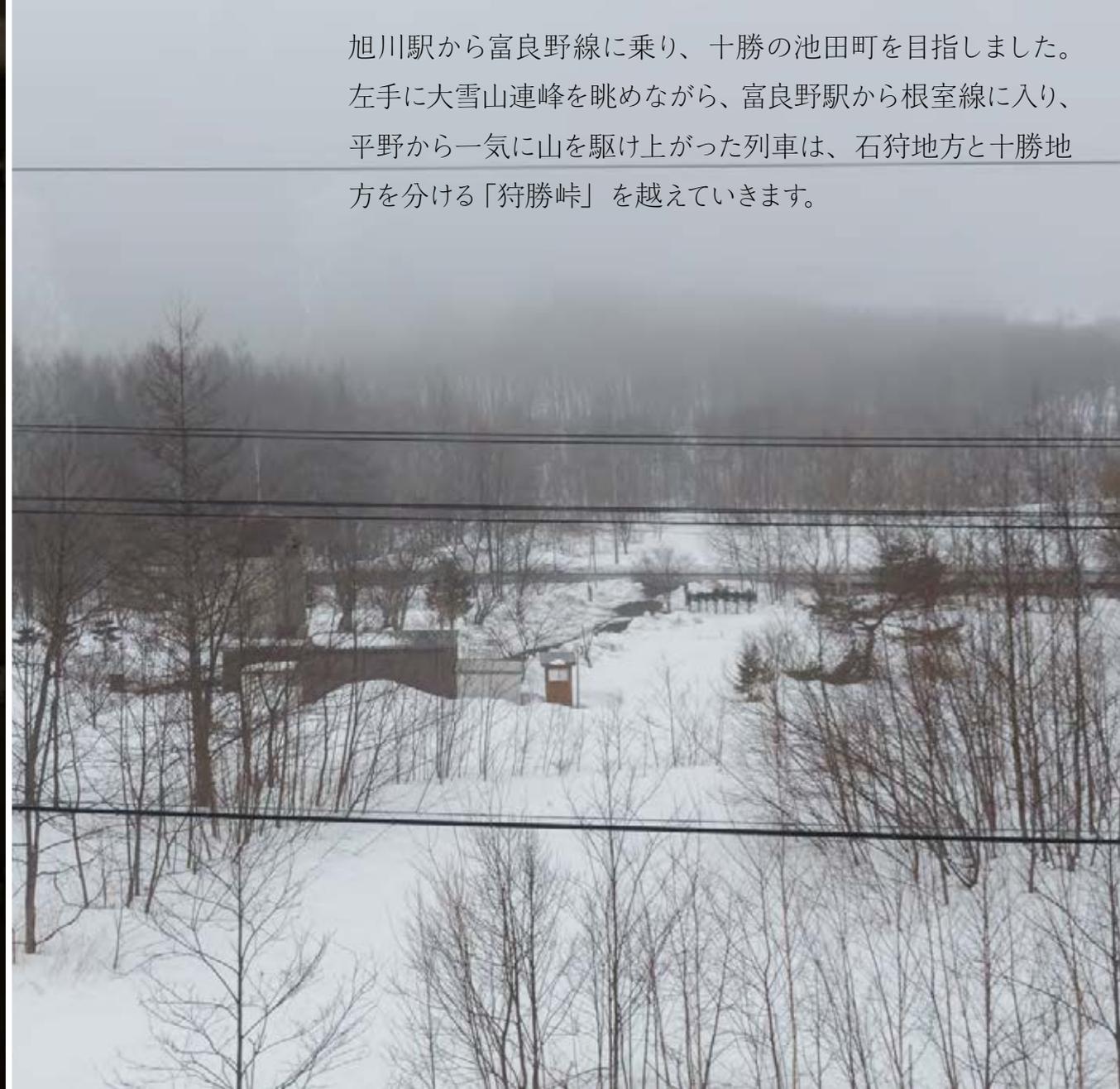
北方文化圏の暮らし

CLICK

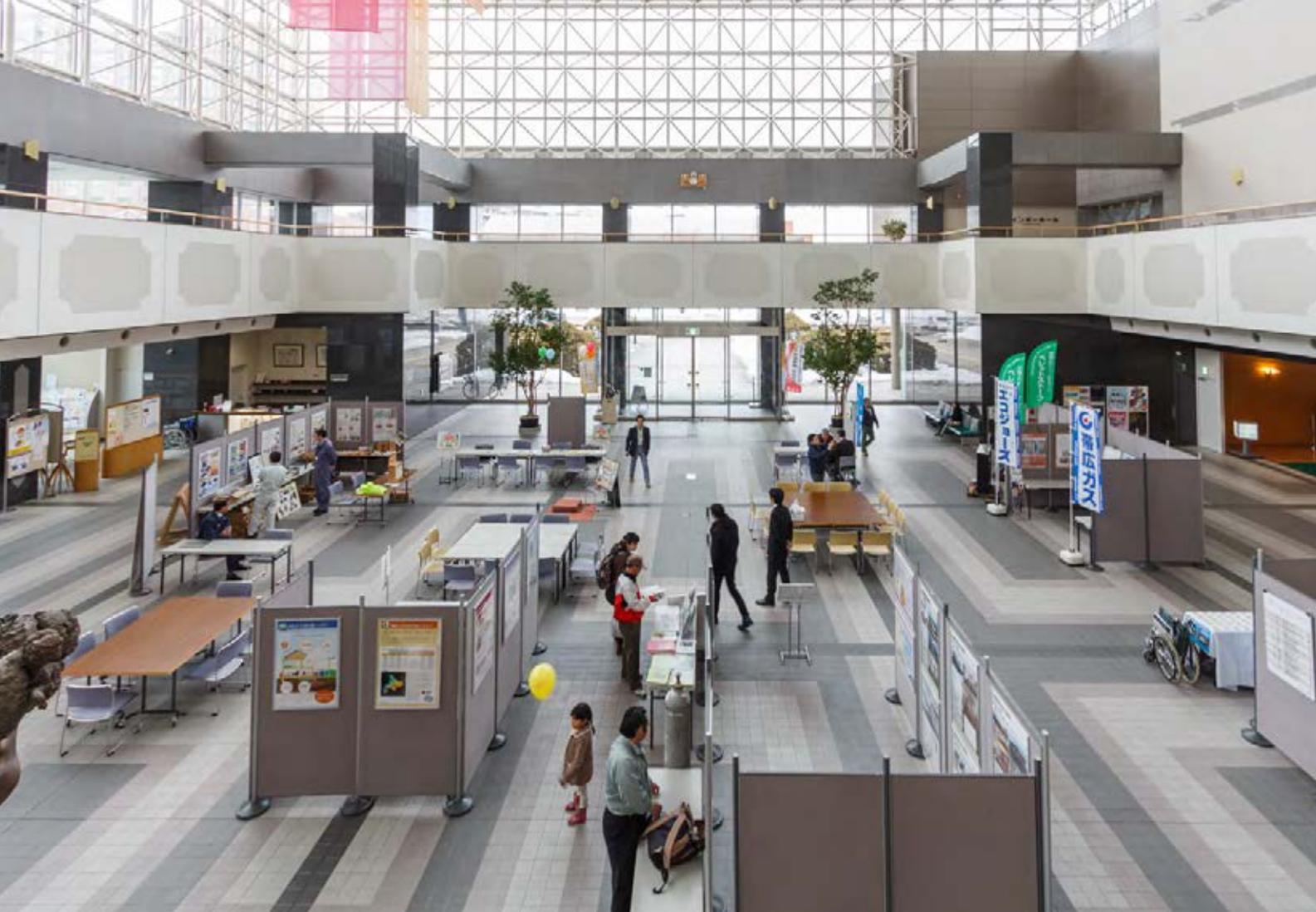


十勝 池田町の開拓者たち





旭川駅から富良野線に乗り、十勝の池田町を目指しました。左手に大雪山連峰を眺めながら、富良野駅から根室線に入り、平野から一気に山を駆け上がった列車は、石狩地方と十勝地方を分ける「狩勝峠」を越えていきます。



エコな暖房器具として注目されている木質ペレットストーブ（マルシヨウ技研のブース）や、北方型住宅の実例パネルなどが展示されていました。



旭川から帯広に到着し、池田町「赤坂建設」の赤坂正さん（十勝ツーバイフォー協会会長）と合流しました。帯広駅前のとちプラザでは、北方型住宅フェアを開催中でした。「北方型住宅」とは、北海道独自の基準とシステムで設計・施工された、高断熱・高气密・省エネルギー・高耐久性性能をもった住宅のことです。



カラマツ材の「CLT」(クロス・ラミネイティド・ティンバー) やコアドライ技術を使ったカラマツ芯持材なども展示されました。



各ジャンルの専門家を招いたセミナーでは、十勝の気候に適した省エネ住宅のありかたや、新たに設けられた北方型住宅の基準・システム「きた住まい」の説明、補助制度の紹介、カラマツなど道産材の活用方法などの解説がありました。また岡本建設の高橋隼人さんは、とちり型エコ住宅の施工例をとり上げ、断熱性を高める付加断熱工法を紹介しました。



赤坂建設の帯広事務所。同社のルーツは明治40年(1907)にさかのぼります。北海道に移住した福島県出身の大工・赤坂貞蔵氏は、大正のはじめ鉄道開通と共に池田町に移ります。2代目の赤坂弘氏は3階建の中島病院など、木造在来工法による大規模な建築を建てました。そして3代目の赤坂芳雄氏は、北米の視察旅行をきっかけに道東ではじめての2×4(ツーバイフォー)建築を手がけます。芳雄氏をはじめとした十勝2×4協会加盟工務店の活動により、十勝では全国平均(2割)を大きく上回る6割以上が2×4工法で建てられるようになりました。



中島病院(池田病院)



赤坂建設帯広事務所に近い「瀬上製材所」は、十勝産のカラマツを中心にした製材所です。カラマツは産業用パレットや梱包材などに多用されていましたが、同社では柱や梁材、集成材などを手がけ、住宅への利用促進に力を入れています。



赤坂さんの自邸を訪ねました。床下全体に土間コンクリートを打った基礎断熱工法を採用し、床下の温水配管によって暖房を行っています。家全体がポカポカと均質に温まり、1階と2階の温度差をあまり感じさせません。



傾斜地を利用して、2階から裏庭の木製デッキに出られるようになっています。屋根は「スノーストッパーーフ」(雪止めリブの入った屋根材)によって落雪を防ぐ仕様です。



池田町の赤坂建設本社には、事務所のほかに2×4のパネル組み立てラインや資材の管理倉庫などがあります。



マックス社製の「2×4フレーミングマシン」は、北海道内で最初に導入されたものです。2×4材や2×6材を使い、決められた長さの釘（色分けされている）を打ち込んで壁パネルなどを製作してから現場で組み立てます。北米から輸入される2×4材はJ-Gradeという特に質の高いものだそうです。





▲Iジョイスト (左) はOSBとLVLの複合材で、経年変化によるへたりが少ないそうです。



作業場は「I (アイ) ・ジョイスト」などを利用して建てられた木造の大空間になっています。2×4のルーツといわれる「バルーン・フレーム工法」は明治期に北海道に伝わり、札幌時計台をはじめ開拓使庁舎、学校、病院、軍の施設から、教会やニシン番屋など大型木造建築に導入され、北海道の開拓時代を支えていました。



▲ 北海道ではお馴染みの遮熱性の高い樹脂製サッシ。30年程前から導入が始まり、ガラス3枚(3層)タイプが増えています。



2×4材には2×4、2×6、2×8、2×10などのサイズがあり、壁厚や用途により使い分けられています。北米や北欧からの輸入品が大半でしたが、赤坂建設では道産カラマツ2×4材の導入も試みています。またカラマツから作られた合板も流通するようになり、利用促進によるコストダウンが待たれています。



▲ 電気（ヒートポンプ）とガスで暖房・給湯を行うハイブリッドシステムを採用しています。

▼ 軒下に通気のスリット（デハイリー）を設け、小屋裏を換気して内部結露を防いでいます。



2×4工法は平屋建ての住宅にも採用されています。屋根にはスノーストップルーフを採用して落雪を防ぎ、雪かきを楽にしています。晴天率の高い十勝には、このようなソーラー発電パネルを載せた住宅も多く見られます。

東京から池田町へ

池田町には、本州から移り住む人たちも増えています。
8年前に東京から移住した、木村夫妻のお宅を訪ねました。





▼ 一日の大半を過ごすというリビング・ダイニング。南面した窓からは、おだやかな光が差し込みます。



東京のマンションに暮らしていた木村夫妻。移住先を探して全国を旅するなか、釧路で丹頂鶴を見学したあと、たまたま立ち寄ったのが池田町でした。町の名所「ワイン城」でワインを飲み美しい景色を眺めるうち、すっかり池田町を気に入ったそうです。それから6～7年かけて土地をさがし、赤坂建設で家を新築したのは8年前のことでした。「池田町はワインや食べものが美味しい、自然も美しく人がいい」と奥様。家の中では北国の寒さを感じることはないそうです。





3層の木製サッシは、回転して室内から外側を拭けます。Low-E ガラスによって暖房の熱を外に逃さない効果もあり、夏場は強い日差しを防ぎます。



使いやすいⅡ型キッチンの奥には浴室やランドリーがあり、洗濯物も屋内に干せます。季節ごとに近所の人たちが野菜を沢山わけてくれて、ジャムやスープ、ジュースづくり、味噌、梅干し、漬物、山菜と、一年があっという間に過ぎるそうです。「食事会を開くと30年前のヴィンテージな十勝ワインを持参してくれる人もいて、毎日のようにワインと楽しんでいます」と奥様。地元のワインは、地元の食材にフィットすることが分かってきたそうです。



移住を検討した理由のひとつは趣味の木彫りでした。何本もの彫刻刀で彫っていく本格的なもので、音や木くずを気にせず集中できるよう、ミニキッチンを備えた工房を玄関脇に設けました。季節によって木の彫りやすさも違うそうです。



暖房は灯油式温水パネルヒーターを各部屋の窓下に設置し、家全体が温まるよう工夫されています。2階には寝室、和室の他、浴室やトイレも備えているので、子ども達が訪れた際は2階で気兼ねなく過ごせるそうです。池田町は「とちぎ帯広空港」から近く、東京からも数時間で来られる便利な場所で、飲食店やスーパー、病院、公共施設も充実しています。



庭の木々には、アカゲラなど沢山の野鳥たちがやってきます。
手作りのハスカップジャムケーキとハーブティを頂きました。



「池田町は空気や水がよくて、東京とは別世界と思います。ただ北海道への移住には不安もありました。今は、この家だからこそ快適に暮らせます」とご主人。実はご主人は旭川の出身で、昔の寒い住宅のイメージが残っていたそうです。「町内でも場所によって環境は変わりますから、時間をかけて色々な土地を見ることが大切」と移住のアドバイスしてくれました。



池田町名物のひとつが「ハピネスデーリィ」（嶋木牧場）のアイスクリームやジェラートです。赤いルバーブや十勝ブランデー、ハスカップ、かぼちゃ、ゴマなど十勝で採れた食材と、牧場で200頭ほど飼育されているホルスタインの生乳を使った手作りのアイスクリーム、ジェラートを目当てに、遠方から沢山の人が訪れていました。



農園の基礎を築いたのは、今から約120年前の明治30年、鳥取から小作農として入植した嶋木悦蔵・しな夫妻でした。21戸の開拓農家と共に池田町清見の地を拓き、産業組合や寺院、神社、小学校などを自らの力で建てていったそうです。



嶋木夫妻の勤労が実り自作農となれたのは、入植から45年たった昭和16年。21戸の農家が莫大な資金を調達し夢を叶えたそうです。農園を引き継いだ現代表・嶋木正一さんは35歳の時、アメリカのファームステイで知った自家製アイスクリームに衝撃をうけ、日本には当時なかったプレミアムアイスづくりを目指し、大学とも協働して研究を重ねました。牧場による直接販売という試練も乗り越え、アイスクリームを通じて開拓者の魂を伝えています。



▲ 石膏ボードにはホルムアルデヒド吸着・分解機能のある「タイガーハイクリンボード」を使用していました。



赤坂建設の現場を訪ねました。「北方型住宅」の基準・システムにもとづいて建設中の家で、熱損失係数Q値は1.3程度に設定しているそうです。Q値とは温度差が1℃の時、家全体から1時間に床面積1㎡あたりに逃げ出す熱量のことで、最近ではより正確に特性を把握できる、外皮平均熱貫流率(UA値)を用いることも多くなっています。基礎を凍結しない深さまで掘り下げ、スタイロフォームなどで基礎コンクリートを断熱することで、床下の温度を安定させています。



断熱材を隙間なく充填した上から「防湿フィルムシート」を粘着テープで張り込み、気密性を上げ結露を防いでいます。配線穴にも樹脂を充填し、コンセント部分も丹念に断熱します(左)。床組には「Iジョイスト」などを使い耐久性を高めています(中)。高気密・高断熱住宅は寒い部屋がないため、外気を導入して食品を冷やすストッカーを設けていました(右)。



池田駅前で100年以上の歴史をもつ洋食店「よねくら」は、駅ホームでの駅弁販売からスタートし今も家庭的な食堂として町民に愛されています。名物のおみやげ「バナナ饅頭」は、池田町に鉄道が通った1904年当時に発明され、店では温かい牛乳につけて食べます。池田牛のステーキを贅沢にのせた「牛肉カレー」もおすすりめです。

町の窮地を救ったワイン

十勝ワインによる町おこしに成功した池田町。昭和 49 年に完成したブドウ・ブドウ酒研究所は通称「ワイン城」と呼ばれ町のシンボルとなっています。





- ▲ 十勝ワインを蒸留したブランデーもつくられています。
- ▼ 1960年代からのヴィンテージが保管されていました。



ワイン城では地下熟成室などの見学ツアーが開催され、日本では珍しいスパークリングワインもここで製造されています。昭和27年の第一次十勝沖地震から冷害が続き凶作に悩まされていた池田町は、その打開策として山ブドウを原料とした町営のブドウ酒醸造を始めます。山ブドウ酒は海外でも評価されましたが、安定して収穫できず産業として成り立たないと判断した町は、極寒冷地でも栽培できる独自の品種開発に取り組みます。その結果生まれたのが「清見」でした。さらに寒さに強い山ブドウとの交配種「清舞」や「山幸」も開発され、国産ワインブランドとしての評価が高まっています。



▲ 直売所には沢山の観光客がやってきます。各種ワインの試飲もでき、池田町の特産品も扱っています。



フレンチオーク樽による「樽熟成」も十勝ワインの特徴です。池田町出身のドリームズカムトゥルー吉田美和さんとコラボしたワイン樽もありました。池田町民は年間10L以上のワインを飲むといわれ、中学校ではブドウの収穫体験も行われています。毎年秋のワイン祭りには、ワイン飲み放題や池田牛の丸焼きなどを目当てに、全国からワインファンが集まります。



池田町清見の画廊喫茶「ムーン・フェイス」は、平成4年に大阪から移住した杉山夫妻の喫茶店です。ご主人は透明水彩を描く画家で、雑誌で十勝移住の記事を見たことをきっかけに一家で池田町へ移り住みました。古い教員住宅を借りて生活をはじめ、平成6年に赤坂建設の設計・施工によって念願の画廊喫茶を開店しました。



▼ 杉山さんの最新作。ブドウ・ブドウ酒研究所のフランス
ワインツアーに参加し、フランス各地の風景を描きました。



ご主人は水彩画教室をひらきながら創作を続け、透明水彩画は十勝ワインのラベルにも採用されました。「大阪から池田町に移り住んで、助け合い精神の大切さを知りました。雪かきや子どもの世話など、地元の方との関係が大切」と奥様。

平成 16 年、杉山夫妻は喫茶店に隣接した自宅を建てました。





平成元年に設立され、現在約 1100 頭の羊が飼育されている羊牧場「ボーヤ・ファーム」。福岡県出身の安西 浩さんは、帯広畜産大学で羊の繁殖学を学び、設立されたばかりのボーヤ・ファームに勤務したのち、今は牧場の代表をつとめています。





ファームの雄羊たちは半年～1年で食肉として出荷されていきます（雌羊は繁殖のため残されます）。2月は出産のピークで、出産後は親子関係を築くため2～3日のあいだ同じ柵の中に囲っておくそうです。安西さんは自ら全国のレストランを訪ね、羊肉の販路開拓をすすめてきました。今では高級羊肉として、イタリアン、フレンチの有名シェフにも評価されるようになっています。



初夏から秋にかけて開かれる「Sheepdog show」には年間 8000 人以上が訪れ、池田町の観光スポットになっています。ショウの主役ボーダーコリーは、牧羊犬として世界的に最も多く利用されている犬種で、羊を追う本能をもっているそうです。

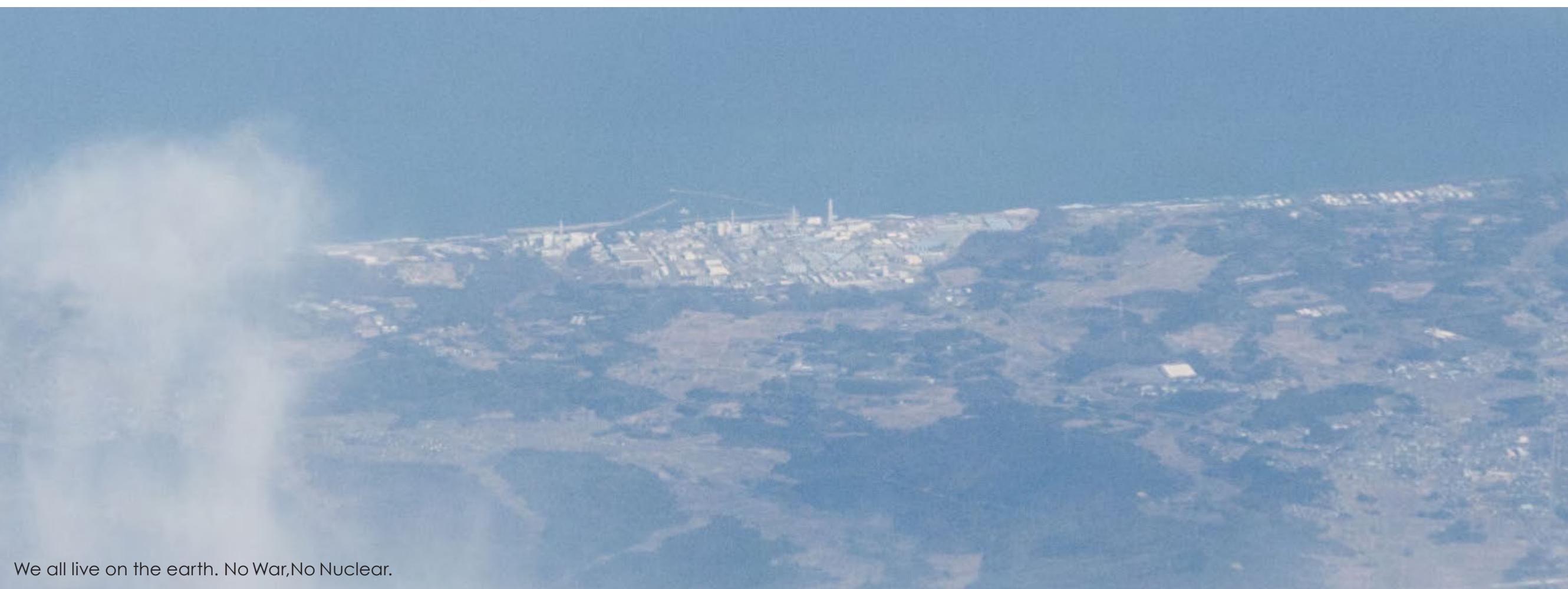


羊の柵などには、赤坂建設の廃材を有効利用していました。



ボーヤ・ファームの丘を上った展望台からは、池田町を一望できます。





We all live on the earth. No War, No Nuclear.

▼ Web マガジン コラージュは、オフィシャルサポーターの提供でお届けしています。

Copyright © 2015 Shiong All rights reserved 無断転載・複写を禁じます